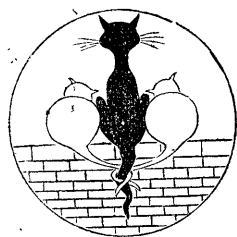


インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。



浄土教の現在

梅村 舜道

浄土宗は全體未來教であつて現世を輕んじ、現世に疎い宗教であらうか。換言すれば、現代は新文化の建設とか、社會の改造とか云ふて將に現世の改造に全力を注がむとして居る。浄土宗は斯様な問題に無關心な宗教であらうか。浄土宗は厭離穢土欣求浄土、或は捨此往彼など、云ふ所から考へて見ると一往、或は表面どうしても、現在改造問題などには頗る縁の遠い宗教であると云はねばなるまい從來斯く考へられ、又現代の識者と云ふやうな人々にも此の考へを以て居る人は頗る多いやうであり又浄土宗内の人々にも此の問題は頗る難解な、現時最も突き當つた問題のやうである。引いて浄土宗

義と社會救濟問題、念佛專修と現代實際生活問題、此等は隨分現時の淨土宗徒としては當面せる難問題たるは事實である。淨土宗は將して現世と縁の遠いもので、現代の社會問題、若しくは、現世生活とは調和の取れぬ宗教であらうか。どうも一往若しくは表面は現世に極めて縁遠い宗教としか見られないやうである。併し眞實どうであらうか。此れが茲に經釋及び實際の上から決着して見たい問題なのである。

二

一體、物は一の標準を立て、掛らぬといくら論議しても正鵠を得ぬものである。現代は過去時代より進歩して居るか、又は退化して居るか、こんな大袈裟な事を云ふた所が、所謂物質文明とも云ふべき生活上の便宜より云へば大に進歩して居ると云へよう、然し精神界の宗教とか哲學とか藝術とか、道德とか、人間とか云ふことになると思はれてどうであるか頗る難問題で寧ろ退化して居ることが甚だ多いのであらうと思はれる。淨土宗は宗教であつて佛教である。凡そ佛教の指示する第一要諦は何んであるか。まさか現世人間生活の便宜と云ふのみが第一義ではあるまい。健康とか、長壽とか、富貴と權勢とか云ふことが第一要諦ではあるまい。佛教の要諦は云ふまでも無く、迷界より悟界に通達し、有限差別の境界より無限平等の世界に出で、生死界より涅槃界に進趣することではなければならぬ。頗る惱界より解脱無礙界に通入する教でなければならぬ。此は人間界に於ける特殊な佛教界と云ふ限られ

たる教條でなく、一切世間の覺醒は畢に此所に歸入せなければならぬものであると信ずる。人間は唯人間性の受用に留るものでなく進んで神性佛性にまで醒めなければならぬものであると思は。神性佛性の覺醒なき愛樂榮華權勢富貴をも何物ぞ。若し神性佛性の覺醒が佛教の要諦であると共に、一切人間の最終の歸趣であり、人間文化の根本要諦であると云ふことが確定すれば、佛教中に於ける淨土教淨土宗が現代若しくは個人の現世に於ける眞實使命が充分に批判され、考慮され、決定されること、惟ふ。

三

如上論據より經典を見る時は、無量壽經卷上に云はく「其れ衆生有りて、斯の光りに遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟にして、歡喜踴躍して、善心生ず」と。同下卷に云はく「壽命甚だ得難く、佛世亦値い難し、人信慧有ること難し、若聞かば精進に求めよ法を聞きて能く忘れず、見ては敬ひ得ては大に慶ぶべし、則ち我が善き親友なり、是の故に當に意を發すべし、設ひ世界に滿つる火をも必ず過ぎて要す法を聞け、會す當に佛道を成じて、廣く生死の流を濟ふべし」と。又同卷に云はく「又彼の菩薩乃至成佛まで熙趣に更らず、神通自在にして常に宿命を識る。他方五濁惡世に生じて、示現して彼に同じ、我が國の如くならしめむをば除く」と。又同卷に云はく「汝等是に於て廣く徳本を植へ、恩を布き施惠して、道禁を犯すこと勿く、忍辱と精進と一心と智慧とを以て、轉た相教化して、徳を爲

し善を立てよ、正心正意にして齋戒清淨なることを一日一夜すれば、無量壽國に在りて善を爲すこと百歳するに勝ぐれたり、所以如何となれば彼の佛の國土は無爲自然にして、皆衆善を積むで毛髮の惡無し」と又曰はく「佛の遊履したまふ所國邑丘聚、化を蒙らずと云ふこと靡し、天下和順し、日月清明にして、風雨時を以てして災厲起らず、國豊かに民安くして、兵戈用ふること無く、徳を崇め仁を起して務めて禮讓を修す」と。凡そ此等の文枚擧に違らず、抑々彌陀の誓願が釋尊に依りて人界に傳紹せられたるは、固より一切人類の眞實救濟、即ち佛性覺醒の眞實直路を示されたるに外ならず。されば吾人は釋尊の指示に依り有智無智を問はず、罪過の輕重を論せず、現相を改めずして直ちに彌陀の誓願海に投する時、佛光直ちに現世を照らし給ひ、現世直ちに佛性を覺醒して、淨土涅槃界の道永へに闡くべし、仰いて信すべきである。

四

更に宗祖法然上人の求道の體度と淨土宗の宣言と、一代の御教化は最も力強く這般の消息を物語るものでなければならぬ。宗祖上人は極めて眞面目に佛性周顯への道へ突進して、天台眞言八家九宗の教觀を實修せられた。然し乍ら教は高く機は低く、彼も此も長く現世の功驗を得給はず、思ひ煩らひ給ふこと二十有五年、終に一心專念の文に依り凡夫直往佛性の眼點じ、現當の證人を確認して茲に淨土宗の開立となつたのである。されば選擇集に曰はく「諸行は機にあらず、時を失へり、念佛往生は

機に當り、時を得たり、感應豈唐捐ならむや」と亦曰はく「當に知るべし淨土の教は時機を叩きて行運に當り、念佛の行は水月を感じて昇降を得たり」と此等の文を拜見するに、佛性の開顯、得脱の實功、凡夫としての吾人が直ちに現在より實益のあるは、唯口稱の念佛であつて、現當の安心は唯往生法である。却つて現世の證入を勸むる聖道自力の法門は、表面現世に最も密接して居るやうであつて其實最も現當の佛性開發に力の無いものである。然るに口稱他方の法門は自力を捨て、他方に托し、穢土を厭離して淨土を欣求する點よりする時は、頗る現世に疎い教のやうであるが其實現世に即したる自他凡夫の上、濁惡無方の現代に於ける無二の法雨としては甘露味を享受することが出来るのである斯うなると聖道淨土一往表面の宗義の相違は皮肉なる反對現象を帶びて來ねばならぬ否、斯くあるが當然であると思ふ。

五

厭離穢土欣求淨土と云ふことは、尤も其の中心問題は精神主義であつて、決して物質的形體的の事でない。曰はく穢土の中心は無明を根本とす貪瞋痴の境界である、淨土の中心は清淨光歡喜光智慧光不斷光等の佛性圓現の涅槃界である。凡そ佛道を求むるの人誰か此の志無からむやである。宗祖上人の示導此條最も慙である、一々文證を引く繁を削ぐ、志あらむ人は宜しく其の化導の跡を尋ぬべきである。

淨土宗は萬行を選捨して彌陀の本願たる唯一口稱の一行にまで結歸する。然し此の口稱は一行は隨一、若しくは單一のありふれたる少善根ではない。大善根にして亦多善根、勝善根である。萬德所歸の各號にして一切の善行悉く此の中に攝まると習ふのである。一切世間出世間の善行悉く此の一行に備はりて萬善の根源であつて、自ら獨尊歸趣統攝の道理を具し、萬善萬行の枝葉は此の善本に據りて其の生氣を帶び成長を遂げる性質のものである。

